

平成 27 年度校内研究のまとめ刊行にあたって

— “だれもが生きやすい” 共生社会の実現を目指す 校内研究 3 年目—  
「わかる・できる授業づくり」の楽しさを

校長 奥村 美由

1994 年、ユネスコの会議においてサラマンカ宣言が出されました。「すべての子どもは誰であれ基本的な権利をもち、また享受できる学習レベルに到達し、かつ維持する機会を与えられなくてはならず」「すべての子どもはユニークな特性、関心、能力および学習のニーズをもっており」・・・「このインクルーシブ志向を持つ通常の学校こそ、差別的態度と戦い、すべての人を喜んで受け入れる地域社会を作り上げる、と謳われています。本校の校内研究のテーマ「一人ひとりの“よさ”を活かし伸ばす 授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮の研究」は、これを三浦半島地域においてどのように具現化し実践していくかの研究だと考えます。

3 年間の研究では、1 年目「研究テーマの共通理解と基礎的環境整備計画」、2 年目「『参加』を促進する基礎的環境整備の実施と研究の地域への発信」、そして3 年目の今年「『理解』を促す授業づくりと合理的配慮の集積 それらの地域との共有」とグレードアップしながら進めてきました。今年、これまで2年間取り組んだ参加を促す段階から、授業の充実を中心に据え「セカンドチャレンジ」を合言葉に取り組みました。また『武養UG新聞』を発行し校内の共有化・全体化を図りました。

子どもたちの実態差が大きい特別支援学校で「わかる・できる授業」を目指すには、一人ひとりの子ども達の特性や実態把握を十分に行うと共に、授業内容の組み立て方、教材研究、授業者チームの役割分担等の検討が欠かせません。授業のUD化ではスモールステップ化、視覚化、身体性の活用、焦点化がポイントであり、中でもその授業の目的を押さえての「授業の焦点化に向けての展開の構造化」が大切と考えます。子どもたちがワクワクしながら授業に入り込めるよう「ひきつける」「むすびつける」「方向づける」「そろえる」。そして子どもたちが「わかった・できた」と実感できたならば、それが教師自身の喜びにもなります。そのような授業づくりを目指して各学部ごとに教科・領域を定めて研究に取り組みました。

最近「授業のユニバーサルデザイン化」という言葉をよく見聞きします。インクルーシブな社会を実現するためには適したツールだからなのでしょう。合理的配慮は、特別支援学校においてはどの場面においても行われていることです。合理的配慮の集積が特別支援学校における授業であり、授業のユニバーサルデザイン化と合理的配慮は対になる関係です。ただし、「学習内容の個別化と学習活動の集団化の両立」はなかなか難しく、「理解」から「習得」「活用」を包括した授業づくりのために不断の努力が必要です。さらに、地域との共有化は緒についたばかりです。

授業をご覧いただき、この冊子をお読みいただいて忌憚のないご意見を頂ければ幸いです。また、本研究にご協力いただいた独立行政法人特別支援教育総合研究所の神山努先生はじめ多くの皆様に感謝申し上げます。